

## 保育は深く面白い ～一生懸命生きる子どもと共に～

中西 昌子

京都市教育委員会指導部学校指導課参与

10年間の小学校教師生活の後、「幼稚園の先生になりたい」と幼稚園教諭となりました。その頃の小学校では、幼・保の育ちや学びに関心を持つとする文化が、あまりなかったように感じます。

幼児教育が理解されないのは発信不足ではないかと考え、周りからの後押しもあり『保育は深く面白い～一生懸命生きる子どもと共に～』を日本教育新聞に連載することになりました。幼児の面白さや有能さ、子ども達の姿に魅せられて、何を育てておくべきなのかを学び綴ったものです。私のフィールドは、幼稚園や教育委員会ということで、3歳からの幼児期に偏ったお話になってしまいますが、保育する上で大切にしてきたことをお伝えします。

3歳児で入園した子どもたちは、先生との信頼関係を基盤に、主体性を発揮していきます。ゆったりした時間や空間、受け止め見守る保育者の存在が大事ではないでしょうか。好きなことがとことんできて、夢中に遊べる子は夢中に学べる子になります。信頼関係の築き方はやり方も時期も違うので、あの手この手で一人一人に寄り添うのが保育の醍醐味であり、まずは気持ちに寄り添い一緒に遊ぼうと思い、3歳児を保育していました。

初めて担任をしたのが、4歳児でした。小学校では『みんな仲良く』と目標を掲げていたのに、『気の合う友達と遊びを楽しむ』というめあてにビックリしました。4歳児の発達を知る中で、自分で気の合う友達を見つける過程を見守り、つなぐことが保育者の大事な役割だと理解しました。喧嘩をしたり、仲良くなったりを繰り返すのが子どもの世界。喧嘩は相手の気持ちを推しはかる良い機会、自分の心の揺れを感じる経験も大切です。忘れることができ、根に持たない、柔軟に立ち上げられる、そんな幼児の時期に、嫌な思いも経験して大きくなってほしいと思うところです。受け止める・つなぐ・向き合う、そんな丁寧な対応が大切ではないかと思えます。

5歳児になると規範意識が飛躍的に伸びると聞きました。確かに、遊びの中でルールを守ろうとしたり、そのルールを自分たちで変えようとする姿も見られます。幼児期の経験により、ルールは守らなくてもはいけないけれど、より楽しく遊ぶため、よりよく暮らすためにはどんなルールが必要なのか、と柔軟に考えられる子どもに育つのではないかと期待します。また、片付けの時間にも、たくさんの学びがあります。自己調整力や公共心…そして、この時間は、今日の遊びを認め、明日のめあてを共有する大事な時間だと意識してきました。5歳児の遊びや活動の中には、10の姿がさまざまに現れます。一人一人を焦点化すると、昨日とは違う今日の育ちが見えてきます。その成長を見逃さず褒めて、達成感や充実感、自信と誇りをつけてあげたいと思っています。主体性を育て、自分で遊びや生活を進められる環境作りが大切です。そして、最大限に子どもの意見を取り入れる気概を持った保育者でありたいと思ってやってきました。子ども達のこれからの人生の基盤は、幼児期に育ち、そのモデルとなるのは保育者なのです。

世界的な研究により、よりよい人生を送るためには、社会情動的スキル(非認知能力)が非常に大切であり、社会情動的スキルを身に付けると認知的スキルが伸びるということがわかりました。つまり、乳幼児期の質の高い保育とは、子どもが主体的に環境に関わり、仲間と共に遊びに熱中するよう促す保育であり、その育ちを小学校以上の教育へつなげることが重要だとわかりました。幼保小の接続期を『架け橋期』と名付け、互いの良いところを取り入れ、充実して楽しく安心して学べる環境を作るよう推奨されています。京都市でも令和4年度より取り組みを進めています。ぜひ、保育の素晴らしさや難しさ、重要性、幼児期の発達などを伝えていきましょう。できれば自分たちの保育を見てもらいませんか。小学校の先生方はきっと興味を持ってくださるでしょう。